

---

## ドゥルーズの感性論における反復と旋律

### — 『差異と反復』における「縮約」と反復について —

織田 理史

---

#### はじめに

本発表では、反復と旋律という観点から、ドゥルーズの『差異と反復』における受動的総合と能動的総合について論じる。なぜ旋律が問題となるのか。ベルグソンが相互浸透する旋律という強力な直観を援用して純粹持続を論じていくのに対し、ベルグソンに影響を受けたドゥルーズは、一切「旋律」という語を用いない。ドゥルーズは、感性的な水準においてさえ、徹底して差異と反復の概念を用いて説明しようと試みるあまり、ベルグソンの有していた旋律という強力な直観を、いわば一般化すると同時に、ある面では失っているとも考えられるのである。しかしそれは、単に、ドゥルーズとベルグソンの感性論の相違点としてのみ捉えられるべきでなく、むしろドゥルーズの体系においては必然的であったのだ、ということを示すことを試みるのが、本発表である。

#### 1. ドゥルーズの時間論と「第一の総合」

ドゥルーズは、『差異と反復』において自らの時間論を展開するにあたって、総合の三つの段階を分けた。時間の第一の総合は感性的なレベルに関わり、現在中心の時間論である。第二のものは記憶に関わり、従って過去中心の時間論である。第三のものは新しいものに向けられる、未来中心の時間論である。それぞれの総合において、参照されるべき哲学者の対応がある。第一のものはアウグスティヌスの時間論であり、第二のものはベルグソンのそれであり、第三のものはニーチェのそれである。そのうち本発表で採り上げるのは第一のものである。

さて、第一の総合がアウグスティヌスの時間論に依拠していると言っても、そこにはベルグソンの感性論の強力な援用がある。さらに、この総合において主題的な、「受動的総合」の概念は、フッサールの用語に由来するものである。このように、過去の様々な哲学が絡み合うのが第一の総合の特徴であるが、その絡み合ったものを解きほぐす作業をこの章では行う。

ドゥルーズにとって、時間の出発点は、どこまでも反復である。そしてドゥルーズは、反復の二つのタイプを分ける。すなわちベルグソン型の A、A、A、A……という反復と、

ヒューム型の AB、AB、AB、A……という反復とである<sup>1</sup>。これらの反復の契機となるものが、外在するが、感性がそれら契機を捉え、「縮約 (contraction)<sup>2</sup>」することで、初めて反復となる。反復は、本質的に非連続的である。すなわち、ベルグソン型の各 A も、ヒューム型の各 AB も、またその内部の各 A と B も、どれもが独立している。すると、それら非連続的なものをその上で成り立たせるような、連続的なものが要請される。それは感性以前の段階では空間であり、感性によって捉えられたのちは、漠然と精神である、と述べられる。「反復を語るためには、反復を観照する精神のなかにその反復が導き入れる差異つまり変化によるほかない、すなわち、精神が反復から抜き取る差異によるほかはない<sup>3</sup>」。つまり、反復とは定義上、一切新しいものを含まないが、しかしそれを観照する精神には、新しいものを差異としてもたらずのである。ベルグソンの例では、A の次に再び来るべき A という期待であり、ヒュームの例では A の次に来るべき B の期待である。ここまでが、実在はしないが反復の契機としては十分にあり得る A や B と、それらを実際に反復に仕立て上げる精神との間の、真に感性的なやり取りである。

ここまでで、既にベルグソンの感性論との相違が指摘できる。つまり両者の間で、感性的な対象が既に違うのである。ベルグソンは、好んで旋律の直観を援用し、感性的対象の継起として旋律を語る。例えばベルグソンは鐘の音の例を挙げる（ドゥルーズは鐘の各音を、A、A、A、A……と記号に置き換えた）。四つの鐘の音は、それぞれ論理的には独立している。だが、我々の経験上、我々はそれぞれの音に対応する印象を四回続けて感じるだけでなく、あたかもそれらを一続きの旋律として感じる。これがベルグソンの揺るがぬ直観であった。「私はそれぞれの継起的印象を相互に記憶に留め、知っている歌やリズムを思い出させる一群の音を形成する。そのとき、私は音を数えてはいず、その数が私に作用するいわば質的な印象を集めるに留める<sup>4</sup>」のであり、この時旋律が生じるが、旋律の契機となるべき音の継起は、無条件に外在するものとして認められる。だがドゥルーズにおいては、援用される直観はどこまでも反復であり、あくまで反復の契機となるべき対象の継起が外在するのである。従って A、A、A、A……か、AB、AB、AB、A……という形の反復の契機のどれかが感性的対象であり、それらは決して旋律ではない。つまりドゥルーズにおいて、旋律とは、感性的レベルで可能ではない。

さてしかしながら、ドゥルーズがベルグソンより引き継いだのは、空間に対する質的なものの重視と、表象 = 再現前化への否定的な見方とである。

質的な差異があるところに段階的な差異を認めてきたのだというのが、ベルグソンの哲学のライトモチーフである。……真の質的な差異を知らない点に、われわれを苦しめるにせの問題と幻想のすべての起源がある<sup>5</sup>。

それだから、ドゥルーズは、ベルグソンの、音の「私に作用するいわば質的な印象を集めるに留める<sup>6)</sup>」操作を評価し、それを反復の縮約として、感性的な操作の重要な側面とみなすのである。

ドゥルーズは、この縮約を、「受動的総合<sup>7)</sup>」とも言いかえる。つまりあらゆる能動的作用における原本的なものとして、反復を認めるのである。ドゥルーズはフッサールの用法をさらに拡張して、行動一般において、受動的総合が基礎となるような場合を挙げている。「それぞれの縮約、それぞれの受動的総合が、一つの記号 (signe) を構成しており、この記号が、もろもろの能動的総合のなかで解釈あるいは開示される<sup>8)</sup>」のだ。ここでもろもろの能動的総合とは、「感覚、知覚、さらにまた欲求と遺伝、学習と本能、知能と記憶」といったものにまで拡張される。これら能動的総合において解釈されることになる記号は、受動的総合において与えられる原本的なものとは似ても似つかない。それが受動的総合による原本的なものとは異質であり、記号的であるからこそ、ドゥルーズは、ベルグソンの「数える」作用、フッサールの眼前に与えられた受動的総合の対象の上のさまざまな能動的作用を経て、さらに、眼前に与えられているものを直接的には用いないような能動的総合一般にまで拡張を可能にしたのである。そして、感性的な水準と、有機的な水準一般が、記号化を介して連続的に繋がることにもなる。

さらに、ドゥルーズは感性論と時間論を結びつける。

……根源的総合は、生きられた現在を、あるいは生きた現在を構成する。そして時間が展開されるのは、まさにその現在においてである。……過去は、先行する諸瞬間がそうした縮約のなかで把持される限りにおいて、現在に属し、未来は、期待がその同じ縮約のなかで先取りを遂行するがゆえに、現在に属しているのである。<sup>9)</sup>

縮約、受動的総合が「生ける現在 (La présent vivant)」を構成し、あくまで受動性を保ったまま、その現在を中心に期待と記憶とが生じて、時間論をなすことが分かるだろう<sup>10)</sup>。この後に、第二の総合、第三の総合と続いて述べられるが、本発表ではあくまで第一の総合に焦点を当てる。次に縮約についてさらに詳細な分析を行う。

## 2. ドゥルーズの感性論と「縮約」

ドゥルーズにおいても、鐘の音の例が用いられる。独立した数回の鐘の音は、それぞれ独立しているので、精神は、その一回に対応した刺激を受け取り、その刺激を四回続けて独立に感じるだけである。しかし実際の経験はそういう風にはなっていないだろう。では、

経験的に認められる、四回の鐘の連打が精神に残す、一続きの質的印象は、どう説明されるべきか。記憶が、四つの音を保存し、それを後から精神が解釈しているのだろうか。しかしドゥルーズは、そうは考えない。もし質的印象が記憶とその解釈に依存するのならば、それは本質的に過去のものとなってしまう。だが、質的印象は、記憶から精神が解釈して得られるものでなく、まさに今この瞬間に、あらゆる記憶以前に、感性の水準で得られるものである。

一方、時間論の観点からは、記憶の本質が過去性にあるとすれば、過去と対応する現在があるはずである。魂の主観的時間を考える際、ドゥルーズは現在を直観であると安易に定義することはしない。しかし、過去は無条件的に記憶と同一視される。この過去についての確信から出発して、あらゆる時間論の、「時間には過去・現在・未来の三つの様態がある」という前提に従う。従って、過去としての記憶から出発して、時間論の伝統的な前提である過去と現在の連続性を考えれば、現在とはどこかで必ず認められねばならない（しかしこのすぐ後に、現在と連続性をもたない純粹過去が論じられる）。それは、過去の現在、すなわち記憶がそこで生まれてくるような時間的様態なのだろうか。しかし、後で論ぜられる過去中心の時間的総合の対比が意図された結果、感性のレベルでの時間論は、現在中心の時間的総合（時間の第一の総合 *La première synthèse*）として特徴づけられることになる。そこで、感性の記憶に対する順序的な優位性と、感性の現在性とが結びつく。感性論と（記憶を根拠とした現在中心の）時間論とが結びつく。そして感性とは、受動的なものとして定義され、能動的総合である記憶と対比させられるのである。感性が現在的であるとされる一方で、記憶は過去の的である。もし伝統的な時間観に従って、過去と現在とが一本の線において連続性を持ち、同時的であることができないのならば、記憶と感性とは同時的であることができない。

一方、感性的な段階に、もう一つの特徴が加わる。これはベルグソンを正当に引き継いだ結果の議論である。すなわち、感性的であること、それはあらゆる記号的表象以前であることであり、したがって質的であることである。感性的であるとは、受動的であり、質的であり、現在的であることである。そして、感性の質的側面を強調し説明する意図から、「縮約」という概念が生じる。

すなわち、四時の鐘が鳴っている。……まず、どの一打も、どの振動あるいは刺激も、論理的には互いに独立であり、瞬間的精神である。しかし<われわれ>は、いかなる記憶内容あるいは判明な計算にも関わりなく、持続の本質としての生ける現在つまり受動的総合において、それら四つの音を縮約して一つの内的な質的印象に仕立てあげる<sup>11</sup>。

鐘の音は、まず受動的に精神に入ってくる。一回、二回、三回、四回……この一回一回が完全に独立しているのならば、時間というものはあり得ない。それぞれの回において、なにか連続的なものを考えることで、時間というものは可能になる。同時に、それぞれの回が非連続的ならば、四つの音の纏まりが引き起こす、旋律のような質的印象はあり得ないのである。四回の鐘の音を、縮約して、一つの質的印象へと総合する。これは受動的な総合であり、生ける現在である。そして、この縮約された事例が、なおも続いていく、という期待こそが、未来を指し示す。先行する諸瞬間であるという点でのみ、過去は縮約において引き留められる。それは決して記憶ではない。ここに現在中心の時間が生じるのである。縮約が、ベルグソンにおいては鐘の音の質的印象を集める操作に対応しているのが分かるだろう。そしてドゥルーズにおいては、縮約によって生じた質的印象が、「記号 (signe)」として構成されるのである<sup>12</sup>。あらゆる能動的な行動は、この記号を基にして展開される。この記号を介して、受動的な質的印象と能動的な働きの構成が関係づけられる。

さて、ここまでが感性そのものを成り立たせしめる議論である。実際に縮約によって、質はどのように生じるのか。ここでベルグソンとドゥルーズは、完全に分かれた。ベルグソンが外在的な旋律の強力な直観をもとに感性論を築いたのに対し、ドゥルーズにはそのような直観はない。ドゥルーズの直観は、どこまでも反復 (répétition) である。ドゥルーズは、ベルグソン型の反復 (鐘の音、A、A、A、A……) と、ヒューム型の反復 (因果関係、AB、AB、AB、A……) を引いている<sup>13</sup>。その際、当然考えられるのは、第一にある程度同一的な質 (ベルグソン型なら、相次ぐ A) があつたからこそ、縮約がそもそも可能であつたということ、第二に、縮約によってこそ、A は出来事の単なる非連続的な継起でなく、一つの質的印象をもたらした、ということ、この二点である。前者は驚くほど無視されている。しかし、旋律とは、この無視された一つ目の点において重要である。まさにこの点、ある程度同一的な質があるからこそ、旋律はそれとして認知されるのだ、と思われる。つまり縮約は外在的な条件をもつのである。しかし一方で、縮約が存在しないのならば、継起する音の集合を一つの質的印象をもった旋律として認識できない、ということにも賛成しなければならない。前者は、旋律を感覚以前に認めること、ある水準における同質性を保ちながらそのうちで異化する旋律、もっと一般的にはセリーを認めることであり、後者はむしろセリーを否定し即自的反復のみを肯定することである。

この後のドゥルーズの議論は、ますますベルグソンから別離していく。ヒューム型の反復についての分析が続く。差異は A と B の間にあるだけでなく、各事例 (AB、AB、AB、A……) の間にもある。A と B の間の差異は、各事例の中で閉じられ、事例そのものの反復が開かれる。事例は、A と B という対立関係が閉じられないことには、開かれない。逆に、要素の反復は、その反復自身が全体として対立する二要素のうちの一方向の役割をそこで果たすよう

になる当の事例的構造を指し示すことによってでなければ閉じられない。A と B は、各事例の中で、互いを指示しあう。この A と B の関係、つまり一方が他方から読み取られる、という対になった事態を、ドゥルーズは広く因果的と呼ぶ<sup>14</sup>。以後の分析では、むしろ感性的な反復からいかにして論理的構造が浮かび上がるか、ということに焦点が当たっている。

### 3. 結び—ドゥルーズにおける旋律の可能性と「記号化」のもたらす作用

しかし、感性的なレベルにおいては全てが反復であって旋律でないにしても、ドゥルーズにおいて旋律が可能である、という希望を示すのが以下の引用である。

習慣を反復から独立させる理由を重ねるのは簡単である。行動は、組み立てられる行動においても、組み立てられてしまった行動においても、決して反復ではないからである<sup>15</sup>。

さらに行動とは、受動的総合によって構成された記号 (signe<sup>16</sup>) の組み合わせであった。つまり、ドゥルーズにおいては、能動的総合によって初めて、旋律が可能になるのである<sup>17</sup>。しかも注目すべきことに、ベルグソンにおいて等質的空間に音を並べることは、そのまま表象においてであり、つまり意識においてであった。一方ドゥルーズは、縮約において反復を記号に仕立て上げるが、それは決して意識ではなく、習慣であり、観照である。

わたしたちが習慣とは縮約 (contraction) であると語るとき、わたしたちが言わんとしているのは……観照する精神における反復の融合のことなのである。心を、心臓に、筋肉に、神経に、細胞に帰さねばならないのである。がしかし、この場合の心とは、その役割がひたすら習慣をつけるということにあるような観照的な心である<sup>18</sup>。

この引用にあるように、ベルグソンが感性から意識への直接的なやり取りを語ったのに対し、ドゥルーズは、感性の領野を広げ、それを意識とすぐに結び付けず、習慣の問題にまで拡張する。習慣のあるところ、そこには必ず観照的な心がある。従って、ドゥルーズにおける記号 signe の組み合わせは、様々に拡張された有機的なレベル (心臓、筋肉、神経、ネズミ) において、様々な能動的作用 (感覚、知覚、さらにまた欲求と遺伝、学習と本能、知能と記憶) として展開される。このような様々な能動的作用にまで、旋律は拡張される。それはもはや旋律でなく、より一般的に拡張されたもの、すなわち「セリー (série)」である。このセリーは、決して反復ではないものとして、またより抽象的なものとして、この

著書の後半で特に扱われる<sup>19</sup>。

ベルグソンは、記号化（後者の用語では「コード化」）をかなり否定的に捉えていた。記号化とは、質的印象を変質させてしまうことである。つまり旋律を旋律でなくしてしまうことである。この消極的側面が執拗に強調され、記号の持つ指示作用という積極的側面はほとんど無視されていた。しかし、ドゥルーズは、記号化を、行動を含む、あらゆる能動的な作用に繋がる不可避なプロセスだとして、積極的に評価する。それはあたかも、ベルグソンが感性以前の段階で許容していた外在の多様性を、ドゥルーズは（反復にまで）厳しく制限してしまったが、しかしそれはベルグソンが論じなかった、記号を介して感性的なレベルと連続性を持つ、能動的作用においてより広範な問題を論じようとしたためだったのだ、とも取れるのである。ベルグソンは、質的印象を取りまとめる操作を自ら受動的とは呼ばないし、しかも自らの感性論を、行動などの能動的な作用に結びつけることはしなかった。その結果、感性のレベルから一気に意識のレベルへと移行した。しかし、ベルグソンと違い、ドゥルーズは感性的対象を反復に制限した一方、感性の働きを縮約として、意識をあらゆる有機的組織がもつ観照的精神にまで拡張し、能動的作用を行動以上のものに拡張したのである。

（上智大学）

---

1 Gilles Deleuze, *Différence et Repetition*, 1968, p.96

2 Gilles Deleuze, *Différence et Repetition*, 1968, p.98 縮約 (contraction) はベルグソンが『物質と記憶』で用いた言葉 (Henri Bergson, *Matière et mémoire, essai sur relation du corps à l'esprit*, 1896, pp.30-31.)。ベルグソンにおいては、知覚が必然的に持続の形をとるとき、それによって現実的なものを縮めて、多様な瞬間を互いに延ばす、記憶の努力。しかしドゥルーズは、縮約を感性的な力の根本に据え、従って記憶の能動的作用より以前のものとしている。

3 Ibid., p.96

4 Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889, pp.65-66

5 Gilles Deleuze, *Le Bergsonisme*, 1968, p.13

6 Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889, pp.65-66

7 フッサールは、「数える」という行為は、能動的作用である、と言っている (フッサール『現象学序説』山本万二郎訳、創文社、昭和29年、p.100)。数えられる当の視覚的ないし触覚的对象は、まずもって受動的に与えられた原本的なものとして総合される。この受動的に総合された対象が、能動的作用、「数える」作用によって、数を構成するのである。ところで、フッサールにおいて、この数えられる対象は、あくまで「それ自らという原本性において受動的経験の総合の中に」与えられたものであり、「かかる対象が、能動的把握と共に始まる精神的な活動に対して、出来上がったものとして眼前に与えられるのである」。だから、フッサールにおいて、数えるという行為を含めた、ベルグソンより遥かに拡張された能動的作用（「結合作用」、分

かつこと]、「述語すること」、「推論する作用」)において、記号化は必要ない。

8 Gilles Deleuze,*Différence et Repetition*,1968,p.100

9 Ibid.,

10 現在中心の時間論とは、アウグスティヌスが説く *distentio* (精神の広がり) による時間論である (St. Augustine's, *Confessions Book XI*, Chap X IV)。すなわち現在は直観であり、現在の過去は記憶であり、現在の未来は期待である。

11 Gilles Deleuze,*Différence et Repetition*,1968,p.98.

12 Ibid,p.100

13 Ibid,p.98

14 Ibid,p.99

15 Ibid,p.103

16 ベルグソンにおいて記号が *signe* という単語で出てくるのは、『物質と記憶』(Henri Bergson,*Matière et mémoire, essai sur relation du corps à l' esprit*,1896,p.31) においてである。「……想起は、現実的な知覚を変質させ、そのとき現在の知覚の中で、過去のイマージュを呼び起こさせる *signe* だけを我々は引き留める。」

17 ベルグソンの用語としての「等質的空間」が「補助的空間」とドゥルーズに捉えなおされたことについては、Gilles Deleuze,*Le Bergsonisme*,1968,p.30参照。ベルグソンにおける持続と空間との二元論が、ドゥルーズ自身に与えた影響が示されている。「……われわれは空間の瞬間的な状態を保存でき、それらの状態を一種の<< 補助的な空間 >> のなかに並置させることができる。」ここで、空間は全く持続を含まないものである。空間におけるそれぞれの独立した瞬間を、さらに<< 補助的空間 >> に並べることで、そこに時間があるかのように考えることができる。

18 Gilles Deleuze,*Différence et Repetition*,1968,p.101

19 Ibid. pp.153-168